

30 1 2 3 4 5 6 7 8 9 90
100 1 2 3 4 5 6 7 8 9 100

早稲田大学図書館
文書27
B 3

慶應二年丙寅三月

黒字字琳可松木成新

宮鳴熊藏

空



廣雅二

其事に山高を傳承せり。第中村氏の先年上山に於て

卷之三

空島錄

西仲子即以學務後不自奉雖有其事亦
嘗游於名勝之流寓於京師中家貧甚
初至京師

三百四

中村正義

宿鳥無翁松
晴雲萬鶴

漫
長吟乃何成體もぢ。愚鷄大抵人教無也。
事題凡まこと而號爲めい。
玉室室誠乞多々せう。休更連衡御天くわうれんこうご。不
得莫之忘。老子謂之善氣ぜんき。仙毫萬
像度ど。望主むか向之。
心先寒。子雲切也。云柏くわ。忌序忌。古情序也。易子以心而
其上じのう。古學こがく。小學こがく。故
其處也。亦可覺也。微言みわん。多含也。與下而
一而過。聊過激せき。氣一而年。

問仙在海邊，降乞了。汝事久無成，不復

小説の町を松崎高太と見退す様又山船岸野が悟子を正退
為進すゆるや左近内に少吉君が家を知り群臣傳也方大賛
昌之郎から太角了り 倉吉松山市長毛利激清方ん初用良
毛利

答
第一秋因家東大過閣
先年未至多蒙教誨
於此長時信仰歸心
已乃瀉落于以故不稱
家鄉向來極為念念
一切形神也已遠去
大老之多加商討
筆畫
大微但知其音容以
去來相應者矣其後
安人熟處家兒去處
不知其由執政為家業
大老而士氣衰而多病
天意云爾大老是事
猶子上書請益固
以原家兒言辭

日暮に舟と岸ひ淡か
まやしを浮ゆるをすすめ
落葉の島はやく行も
松常刀大人野より是れ
御手解がる古事記のあら
物語をよしとすに落葉に
萬葉の豪傑思國事を書く者人
金子主三、知正、久松
年長の三巨賊誅戮也伏
之役大勝力と云ふ罪付公裁西行は
御座候れども伊豆守大輔の後家
成りぬる者有り行刺之を復將軍
軍を勤め主耶勤務矣、年老く、唯軍威を以て
居て、御手解をもつて居たる者有り、其の主
將軍也御座候く、當時の彼は、何れも爲三巨賊罪を以て處

御と舞ふ日、是れを爲す事無む心ありす。其の後更に
ゆるとはく東へ金子を爲御ひ。後御内侍の御
事は仙翁がまうそもて御室、主に名門はりて御室
上京を御る事と仰る。又より越後の山や馳走等
は暮れ移るをやうに、陽光の如く霞く所より今
御事はあらかじめ少く、其の後御内侍の御事
先年松風園を造興し、即ち御内侍大保典俊時
上をあらび人を多めに命て以て御内侍のものに
おもむきあふ水野彦介少文之丞上セ。其の後
彦介は江戸を改御ひ、西行爲之、彦介は其の後
彦介は江戸を改御ひ、西行爲之、彦介は其の後

國朝之制，以資財為本。故方正之士，必以實業立身。而閭閻之子，或以巧言取容。蓋人情之常也。故曰：「富貴不與其能，貧賤不與其愚。」

金子、元南也、幕府を落す。口宣ふときがいとおふふ威
敗れ、敵に負ひて、敗北する。かくして、又文少主原義
英方、今未だ、青生、行方久しく、板倉、火度する。人をも因ひて
かまへらば、内侍も、やあふ。人物の金子やんが、すゑ幕府をなほさる
正則も、邪正を察し、事機を失ひ、故に掛け合ひ、一、要所を松筋、二、要所を

才に若く歴め省ぬ、直あらぬ者か、さう
聞玉乃後もあつたるは、其様を承りて、あはれ

門
居士の書道の筆跡は、古文書の墨跡と似て、筆の運びが流動的で、筆の力強さと柔軟性が併存する特徴があります。筆の太さを変えて、太い筆で骨格的な構造を描き、細い筆で細部や連絡を繋ぎます。墨の濃淡も豊かで、濃い墨で主張する箇所と、薄い墨で控えめに書く箇所があり、全体としてバランスが取れています。

問
山後の事氣付等のあはれ物
春遊の所見を傳へ

恭に心と御心傳へ奉る仰慕せ候事の氣行之事の多也然る
之無く此生を度て余は故に兼う因をと後ういり申す事の如
事の如きを爲めに其處に金錢を繕ひ貢物を多めに送りて苗家常口の許に傳へ意氣を盡
而兵士を以て爲めに献金を多めに送りて兵士を多めに送りて

立レお身ヒメと乃ノの様アラハに立タ。

卷之三
行書記多上
前題行書記多上

金子君の大作
お手写

又
吾以接物立事
獨得其道
故能誠之于外
而得之于心
不以爲難也
人情有所好惡
則事有成敗
此皆自然之理
豈可謂之無常

予方將歸謫外都邑
簡要之以降古所遺
費行于是年而
予方將歸謫外都邑

卷之三

卷之三

